

ギリシアの水と古代幻想

志賀英雄



西欧の天才の故国を訪う

私の洋書の書齋に三組の全集がある。それはプラトンとゲーテとペスタロッチのそれである。これらの全集は、今日まで私の思想や人間性の形成に支配的であった三人の天才たちの不滅の業績の集大成であって、私にとつ

市から三一キロのところにあるブルツカから、さらに少し離れたビル村の教会構内にあるペスタロッチの墓と、このペスタロッチー研究に生涯を捧げて、この地に眠る長田先生の墓であった。それは戦後に教育学の教授として新しい出発をした私に、学問上の方向づけを与えてくれたペスタロッチーと、彼へ

ては他の全集にまさって決定的な意味をもつ文献である。私が七月下旬から約二ヵ月、大学の海外研究員として、西欧の旅に出掛けたのも、

実はこの三人の天才の縁りの地を訪ねたい、という宿望を果すためであった。

そしてまず最初に訪れたのは、チューリヒ

私を導いて下さった長田先生に感謝の祈りを捧げるためであった。

次いで私は八月二十八日に、ゲーテハウスで催されたゲーテ生誕記念祝典に出席するため、フランクフルト市を訪れ、この不滅の詩聖を偲ぶに相応しい華麗な「ゲーテの夕べ」をもつことができた。そして私の一冊の本である「ファウスト」により、文学への開眼を与えてくれたゲーテに対する感謝の念がいよいよ深まりゆくのを覚え、生涯変わることのないゲーテの小さな弟子でありたい、と思つた。

最後に訪れたのがプラトンの故国ギリシアである。ギリシアは世界史を学んだ時から私の憧れの国であった。そのために私は大学では古典語にラテン語ではなく、より難しいギリシア語を選び、ギリシア哲学の王者プラトンの深く美しい思想や、典雅なギリシアの美術を学ぶに及んで私の古代ギリシアへの思慕は日増しに強くなっていった。またそのために教会から遠ざかっていたこともある。まことにギリシアは私にとって、美と真理の永遠の故国だと思われたからである。そしてついに私はこのギリシアの土を踏んだのである。

古代幻想とアクロポリス

私のギリシアにおける印象は、まずギリシアの水から初まる。九月一日の午後、私はオリンピック航空のジェット機で、涼しいフランクフルトからアテナイに着いたが、専用バスを待つ間、余りに暑いので空港の小さなレストランで冷たいレモネードを注文した。するとウェイター氏はレモンのエキスを入れたコップに、首の細長いガラスの水差し一ぱいの冷たい水と砂糖入れを添えてもってきた。

このようなことはアテナイのレストランやカフェーにおいては勿論のこと、デルフォイやコリントスそのほかギリシアの田舎においても同様であった。これはギリシアが西欧でも水の乏しい国だ、と思っていた私にとって実に意外であった。そればかりではない。西欧の旅で水の硬質さのために随分悩まされてきた私にとって、ギリシアの水の良さとうまさとは、まさに救いでさえあった。それほど私は水が好きで、よく飲んだ。

レストランで少憩ののち、空港バスで憲法広場のターミナルに行き、アテナイ大学のそ

外国の旅から

ばのホテル・アカデモスに入って、手続きをすませると、すぐ私はギリシアの古典美の最高の象徴として憧れていたアクロポリスに駆けつけた。そしてパルテノン¹の西正面の列柱に凭れて、暮れゆくサラミス湾を望み、眼下に点在する古代アゴラの遺跡やテセイオン神殿、オリュンペイオン神殿の列柱などを眺めたときの感動は終生忘れえないであろう。それからさらにプロピュライアからエレクティオンなどの神殿の廢墟を見たあとで、丘の東南の隅近くの大きな無花果の樹蔭に湧きでる水のあるのを見付けた。このアクロポリスの水を飲んで、人影がまばらになつた神殿の列柱に凭れて、古代アゴラの遺跡やテセイオン神殿のあたりを眺めているうちに、いつしか私は遠い華麗な古代アテナイの幻想に沈んでいった。

私がギリシアを訪れたのは、苦惱に喘ぐ貧しい現在のギリシアを見るためではなく、かつて世界史の王座に君臨した栄光のギリシアの痕跡を尋ね、その永遠性の本質に触れることであった。しかし今日のアテナイには、それを告知する完全なものとは殆どない。栄光の

古典ギリシアは、五二九年にユスチニアヌス皇帝の強權発動によるプラトンのアカデメイアの閉鎖によつてその終末をつげ、以来ビザンツ帝国の支配のもとに、古典ギリシアの本質が完全に破壊され、古代の消滅への道を進んでいった。そして西欧の大学の発祥の場所であり、その学問的理論がいまなお世界を支配しているアカデメイアの遺跡さえ、まだ発掘されておらず、アリストテレスのリュケイオンに至つては、その場所さえ定かではない。それらはギリシア精神の最高の結晶として、全ギリシアの人々が仰ぎみたアクロポリスの荒廢と共に、受難のギリシアを象徴しているように見えた。アクロポリス美術館にある優雅な浮彫の石碑「哀しみのアテーナ」が、滅びゆくアテナイの栄光をすでに予見して、深い哀しみに沈んでいるかのように私には思えた。心の動かされるままに、私はその換作²を買い求めて帰り、書齋で毎日あかずに眺めてはアクロポリスの哀愁を回想している。今のアテナイにおいて、栄光のギリシアの面影だけが、美しい形で残しているテセイオン神殿だけが、哀惜の情に沈む私にとつて、唯一の慰め

であった。

スニオン岬の夕暮の幻想

そこで私は少しでも古典ギリシアの栄光の痕跡を残しているものを求めて、アテナイをあとにギリシアの旅にでた。そしてまず夕暮れの美しさが言語に絶する、といわれるスニオン岬のポセイドン神殿を訪ねた。赤茶けた石灰岩の高い崖の端の近くに十七本の列柱だけを残して立っているドリス風の神殿は、海神ポセイドンを祀ったもので、古代ギリシアの水夫たちにとって、いわば灯台のような役目をなし、また彼らを水難から守護したのであろう。六〇メートルの高さの岬の端に立つて展望したミュルトの海は、左手にヘレナとケオス、右手にパトロクロスとアイギナの島々を浮べて、あくまでも深い紺碧色に澄んで静まり返っていた。

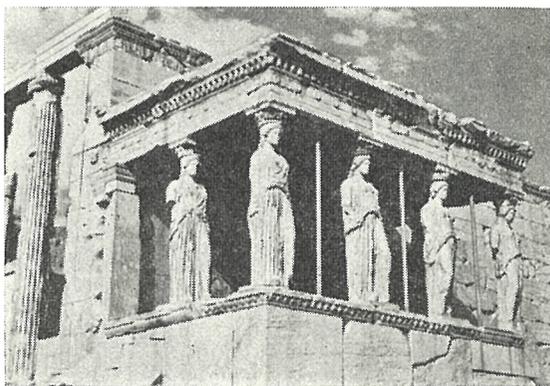
やがて待ちに待ったスニオン岬の夕暮れが初まった。九月の夕陽が西の空を深紅に染めて、鳥々の彼方に沈んでゆくと、それまで紺碧に澄んでいた海はぶどう色に照り映えて、茜色の空と濃紺の鳥影との間に鮮麗な色彩の交響曲を奏で初めた。それはたしかに私たち

の魂をひきこむような深秘の美しさであった。その素晴らしい夕景に魅せられて佇んでいたとき、私は「万物の根源は水である」と説いたタレスの着想が解るような気がした。海のないギリシアは、山嶽のないギリシアと共に、古典ギリシアの栄光を形成することではできなかったであらう。それはナイルなき古代エジプトの栄光と同様であらう。

スニオン岬の夕暮れに深い印象をうけて夜おそくホテルに帰った私は、その翌日は疲れをとるために、アテナイ市内に古代を求めて、ケラメイコスの古代の墓地のあたりを散歩してみた。そしてデクシレオス、デメトリア、ヘゲソなどのいわゆる「アッチカの墓碑」の美しさに感嘆した。もちろんそれらの墓碑は模倣であって、その本物はアクロポリス美術館にあるが、墓碑にこのような美しい浮彫を施して、死者を葬ったギリシア人の美意識は素晴らしい。

デルフォイの哀愁と神話の水

その翌日の九月四日の朝早く、私はギリシア神託の発祥地であるデルフォイに出かけた。九月のギリシアの空は、一片の雲もなく



エレクティオンの柱廊

澄み渡り、強烈な太陽のもとに、小さな河川はすべて涸れて川床を露呈し、乾燥に強いオリヴ、糸杉、無花果などの樹木の緑も色褪せ、土はからからに乾き切っていた。車がレヴァディアに近づいた頃から、遙か彼方にその雄姿をみせ、道が紆余曲折する度ごとに、見え隠れしながら近づいてきたパルナソス山は、まことに雄大で峻しい山容をなし、これ



哀しみのアテーナ

を仰ぐ人々に崇高な印象を与えずにはおかないだろう。二四五メートルのバルナソス山は、樹木の繁茂を許さない厳しく巨大な岩塊をなして聳え立ち、北方のオリュンポスと並んで、古代ギリシア人に神々の住む聖峰として畏敬されてきたのも解るような気がする。目指すデルフォイは、このバルナソスの中腹のかなり急な斜面の、素晴らしいオリヴの森を見下す景勝の地にある。神託の神アポロンの神殿は、僅かに六本の列柱を残して崩れおち、比較的原型を止めているアテナイ人の宝庫と、かなり傷んだ劇場、それにスタディオンとがデルフォイの聖域を形作っている。このアポロン神殿は五七〇メートルの高さの

斜面にあり、ここからオリヴの樹海と重畳たる山々の谷を越えて、東にヘリコン山を望み、西には遥かにコリントス湾を見下すまこと雄大なスケールをもつ聖地であって、古代ギリシア人がこの地をアポロンの神域に定めたのも肯けるものがある。

ギリシアの神々の中で私の最も好きなアポロンであっただけに、崩れ落ちた廢墟の中を哀愁の感をいだいて歩き廻っているうち、巨大なプラタナスの老樹の蔭に、涼しげな音を立てて流れている清冽な水のあるのを見つけた。よく見るとそれは背後にそそり立つ巖々たる岩壁の裂け目から湧きでる泉の水であった。手に拘って飲んでみたら喉がしびれるほど冷たかった。手許の Polyglotts Reiseführer で調べてみると、それは「カスタリアの泉」とよばれ、古代の巡礼者たちがデルフォイの聖道に入る前に、この泉で潔斎したということだ。またほかの本によると、アポロンの神託を受ける巫女は、この泉の聖水を口に含み、聖樹オリヴの葉を噛んで、神殿の内陣中央の台座に坐り祈ったという。そうすると、私もまた数千年も前から湧き続けているこの神

話の水を飲んだわけで、私がギリシアで飲んだ最古にして最高の水だ、ということになる。そこで私もまた古代の巫女に倣って、この聖水を口に含み、オリヴの葉を噛んで神殿の柱に凭れていたら、私の幻想は遥かに遠い古代にまで拡がっていくのを覚えた。

しかし託宣の神アポロンは、その神殿の荒廃と共に亡びさり、肅々と吹きおろすバルナソスの山風だけが、オリヴの葉ずれの音を立てるだけで、アポロンの声を聞く由もなかった。その時、京都美術館で「ミロのヴィーナス」の背景音楽として初めて聞いた「アポロン讃歌」の、あの惻々として私たちの胸をうつつ哀愁にみちたフリユートの旋律が、私の耳底に蘇ってきた。この讃歌の原譜は、デルフォイの神域から発見され、デルフォイ美術館に所蔵されているのだ。

アポロンを讃えるために歌われたあの旋律のもつ哀調は、デルフォイの廢墟に佇み、遠い古典ギリシアの栄光を偲ぶ旅人の私には、あたかも「アポロン挽歌」のように思えて、限らない哀愁に私の心を引くものであった。

(文学部教授・商高校長・教育哲学)

中近東印象記

秦 芳江



筆者とベドウィンの酋長

1
ジュール・ベルヌの小説ではないが、わたしの今回の旅行は、六月下旬にはじまって九月中旬に帰国するまで、約八十日間、丸いのやら四角いのやら八角やらのお金を、なんと十六回チェンジして、世界の半分を廻ったことになる。

この航空機時代に、点の旅行から線の旅行はかえってせいたくだといわれているが、かねて念願の共産圏の体育状況やら何やら、ぜひともこの目で見たいという願いに加えて、折よく、帰途ローマから、大阪のC交通会社が企画した中近東総合調査団の一員として、試験的にカルカッタまで国産バスを走らすから乗って見ないか、という勧誘を受けた。幼

いころから憧れていた聖書とアラビアンナイトの国々を走って帰るのも悪くないな、とつい気軽に考えて出かけたのがこの旅行の動機である。

したがって出発に際して、越智学長はじめ周囲の方々から「まあ、あなたの旅行はローマまでの一人旅の方が心配ですね」といわれたほど、女子大の箱入り娘としては、今でも共産圏ひとり歩きの方が、ずっと大冒険旅行だと考えているのだが、まあ大方の御期待が太陽と沙漠の国によせられているので、残念ながら中近東篇に筆をしばらくことにしよう。

ロシアにはじまって、ハンガリー、チェコ、フランス、スイス、ローマにたどりつくまで、さまざまな傑作な話が多い。まず出国の際、ビザが多すぎてパスポートに貼るところ

がなくなってしまうたり、ダビンチ空港で発見されるまで、日本政府のミスで名前にミスターがついているのに、本人も通過国も気がつかなかったり、ブダペストではフレンチカーンカンに招待されたり、七月十四日にパリのルーブルのニケの彫刻の前で、偶然にも、大学研究所員の高屋氏御夫妻とばったり出合ったりしたことも、書き出したらきりがなくらい愉快な思い出である。まあしごく快調にローマのテルミニ（終着駅）で調査団の一行に落合ったのが七月二十日であった。

出発時のメンバーは、河辺満穂牧師をはじめクリスチャングループ、大阪府の先生グループ、野外活動の専門家グループ、その他技術者グループなど総勢二十八人、そのうち婦人は六名ほどであったが、一万八千キロの長

途の旅で、最後のカルカタでは約三分の一ほど減った勘定になる。

道中、見たこと、感じたこと体験したことを話し出したらきりがなくくらいに予想を超えたことばかりの連続で、毎日毎日が四十八時間ほどの経験をしたことは確かであるが、まず旅行談の定石として行程順に話を進めることにしよう。

2

われわれのバスはイタリーを一周した後、ユーゴのザグレブからベオグラード、スコピエを経て、神話でおなじみのオリンポス山のふもとマラトンの海岸でテントをはったり、泳いだりして、まずアテネおよびコリントを訪れた。これから先は使徒パウロの伝道と反対のコースで聖地に向うことになる。例えばもの静かな寂れた感じのサロニカ(テサロニケ)ひなびた美しい港町カバラ等、色とりどりのドアに飾られた海辺の町、そして夜はこぼれるばかりの星空のマケドニヤを通過、大帝の生地アレキサンドロポリスを出て一時間ほどでトルコ国境へ。

外国の旅より

これまでも、それから先も沢山の国境を通過して感じたことであるが、各国の政情と人情によって、国境の印象が大層違っているのいやでも気がつかざるを得ない。隣接国と仲が悪い時は嚴重なのは当り前であるが、日本の車に対してはこの国も親切で、まずはフリーパスである。国によってはひどく待たせて、あげくの果にバスに乗りこんで来て遊んで行く兵隊や、何かくれないかといった顔で申告書をひねり廻してごたついている税関や、その国の第一印象としてはもう少し人選と考えてもらいたいような国もあった。また、たいていの国は国境間にノーマンズランド(無人地帯)がおかれているのだが、インド、パキスタンのように間髪を入れず兵隊が立っているところでは、概して仲が悪いようであった。

トルコはご存じの親日国、日本人に対してすこぶる好意的である。イスタンブールの魅力のひとつであるトプカピ宮殿を見て、バサールの雑踏に足を向けた時、突然八十才くらいの老人に声をかけられた。アジス・アリスンというこの方は、日本のイスラム研究家だ



イスタンブールのブルーモスク

ある故大久保孝次氏の親友で、かつて一九三五年頃、神学部でイスラム教について講演をなさったことがあるとのこと。「世界の平和のためには、イスラム教も仏教もキリスト教も手をつながなければならぬ」と力説し、帰ったら同志社のみなさんによろしくと、涙

を浮べて握手して下さったことをお伝えしたい。

3

中近東はイスラムの世界であるが、とくに感じたことは、宗教が青年の間に生きているということ、比較的、近代的教養を身につけた若い人たちの多くが、父祖のしきたりを嚴重に守っていることである。また欧米風のジャズよりもひどく単調に聞える民族音楽を愛し、どの街でも酒類は外人向きのホテルか城壁をよほど離れた所でなければ飲めない。したがって多くの青年たちは飲酒の習慣が見られないということである。



ベツレヘムの市街

イスラムの青年たちは一般的にいって、たいていソビエター(敵格)であったように思つた。トルコの首都、出来上ったばかりというような林間都市アンカラを経て、シリアのアレツポへ。クリスマスカードから抜け出しましたというような羊飼いがどこからとなく現われて来る。荒野の印象は、ごつごつの岩山、乾いて地面にしがみついている薊、黒い羊、釣鐘型の土の家、チャドル姿のはだしの婦人(鼻に輪がついている)。まもなくダマスカスへ。途中、ハマ、ホムス、ジェラスなどという旧ローマ時代の遺跡の残っている町々を通過する。ダマスカスについては想像よりもぐんと近代的な都市、各所に前衛風の裝飾が建てられ、冬になると水がいっぱいになるといふ掘割や、夜になるとオアシスの高いポプラの梢に昇って来る銀色の月などが、わずかに既成のイメージを満足させてくれた程度である。観光都市として極力旧状を保存している

イエルサレムの他は、アンマンにしろバグダッドにしろ、われわれのオリエンタルの幻想から程遠い超近代的な都市である。しかしどの都市でも、住民は兵隊を除き昔ながらの服装をして、立派なビルの前を沢山の山羊の群やもの凄いい声を出して啼くロバをつれてゆくり歩いてるし、まして町中がせいじっぱいになり立てているような不思議な人間臭い雰囲気は西欧の都市とは大ちがいであった。聖地に関して、レバノン山、ヨルダン河は、死海、ジェリコ街道、ベタニヤ、ベツレヘム、サマリヤ、そしてイエルサレム、自分の聖書知識の浅薄さに今さら後悔してもはじまらないと残念がり、かつ感激したのである。

4

アンマンからまた沙漠の野営が始まる。食料は現地調達なので、いい加減なアラビヤ語で羊の肉、雞、なつめ、素晴しく大きくて甘いメロン、西瓜、オレンジ、サボテンの実などを買う。果物はとびきりおいしい。

沙漠の温度はバビロンの近くで最高摂氏五十五度になったが、平均四十度前後で、それ

も湿度が十五パーセントくらいなので、煙草に火をつけるとポウポウ燃え出すくらい乾燥度であるからひどく凌ぎやすい。とくに夜営などは快適この上ない状態で、そのうえ埃もないから衣服も汚れないし、清浄また無類である。

しかし人間というものはおかしなもので、まん丸い沙漠の真中で、すばらしい星空を仰ぎながら寝ようとしても、どうもあまり広すぎて落着かない。はじめの頃は寝袋をかかえてうろうろしたことが何度もあった。

沙漠の旅のつきものは、蟬気楼とらくだと龍巻とさそりである。しかしこれもあまりたびたびなので、もう面倒臭くなって写真もうつさなくなってしまう。

それにしてもわれわれのバスは、多い時で一日五〇〇キロも走ったのであるから、昔の隊商たちの一カ月の行程を一日で飛ばしたことになる。ちなみに沙漠を走る現地のバス、トラックはどれもこれもまるでお祭り騒ぎの極彩色であったのには驚かされた。

バグダッド近辺、チギリス、ユーフラテスの流域は水田もあり、なつめ椰子の緑が目

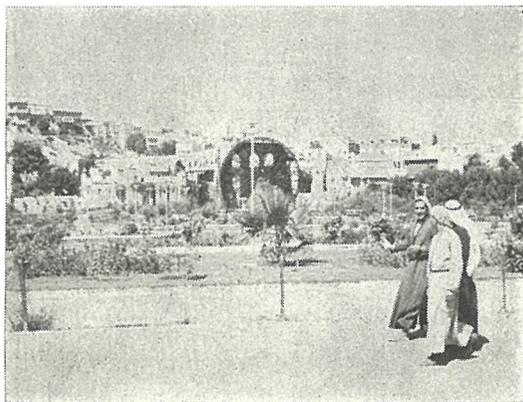
外国の旅より

しみるようであった。イラクとはアグリカルチュアの意であるとか。

ダリウス王の碑を見ながらイランへ入る。ベルシヤの人々はとても彫りの深い瞑想的な顔立ちが多い。とくに女の人は美しい。

テヘランでコレラのためパキスタン国境が閉鎖されたというニュースを聞く。同行の半数の人々は旅行を断念した。

この後の行程は、これこそ沙漠旅行の醍醐味ともいえるべき興味とスリルの連続であった。とくにわたくしの訪れた世界の町の中のものともロマンチックな珠玉、イスファハンのモスクの美しさから、パキスタン国境の沙漠で猛烈な砂嵐に襲われて、ギャングヒュット（土方小屋）に逃込んだところから、沙漠の人々に思わぬ歓待を受けたことや、爆撃前夜のラホールでイスラムの女のお友達が出来たこと、またはインダス、ガンジスの流れ、そしてデカン高原の野生の動物たちの生態など、最後に印パ紛争の渦中に捲きこまれて、やっとカルカッタから飛べたことなど、この紙面では充分に語りつくせないほどの分量であるが、最後のしめくりに一言、一九



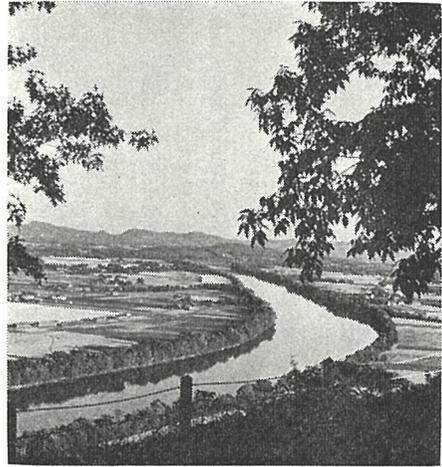
シリアの町ハマ

六五年の夏はわたくしにとってほんとうに素晴らしい夏であった、としか書きようがないのはまことに残念なことではある。

(女子大講師・体育)

アーモストの生活

横本 勝



ニューイングランド風景

アーモスト大学へ

「あれがジョンソン・チャペルだよ。」

こもりした森の上に箱型の時計台が頭へのぞかせていた。飛んでゆく周囲の美しさにみとれていた僕は身のひきしまるのを感じた。

戦後初のアーモストフェローとして同志社に來たダグラス・ウイリアムズ氏に連れられてアーモスト大学に着いたのは、二年前の九月半ばだった。見るものはすべて新しく、美

しかった。広々とした芝生のキャンパスは、緊張している僕を慰めてくれた。チャペルの一階の事務室で彼はいろんな人を紹介してくれた。そして二階に上った。新島襄の素朴な肖像画の前で僕は数分たたずみ、約百年前このアーモスト大学で彼が学んだという事実感激し、二十二才の若輩がそこでこれから始めるといふ期待を伴った恐れとで一瞬混沌としてしまった。

一八二七年定礎のジョンソン・チャペルに象徴されるアーモスト大学は、コネチカット

河流域のパイオニア溪谷にあり、四季それぞれの色をおりまぜるなららかな丘陵にある。『此のアーモストと申す所は』、新島襄は一八六七年、母とみに宛てた手紙で述べている。『「ボストン」より西に当り、五十里程離れ居候へ共蒸汽車に乗る故、ボストンを午後八ツ時（二時）に出で、夕の六ツ時半（七時）に其所に到着仕候。其所の風景は以前のアンドワより一齋よろしく、種々の綺麗なる書生寮、書物庫、珍奇をあつめ置所、「ジムネージャム」等之れ有り、所々に小高き山あり。その間にコンネクチュクト（コネチカット）と申候名高き大河横たはり、その風景のうつくしき、絵にもかきがたくぞんじ候。』ニューイングランドの美しさは、アーモストから北へ車で二十分行ったシユガローフ山頂から見下す風景に代表されるだろう。タバコ農園を小道がぬって走り、だいたい色の長細い納屋が散在し、農園の広がり分断するよう静かなコネチカット河が南に走っている。眼下の農村の白い教会の尖塔が強いアクセントとなって眼に映る。

アーモストでの最初の夜を僕は変な具合に過してしまった。新築のソーシャル・ドミ

トリイのA寮前でウイリアムズ夫妻と別れ、自分の部屋に入ってみた。六畳くらいの個室に窓が一つ、ベッド、机と化粧台付きの衣装ダンス。新しい香りで気持よくなった。四つの個室にバスルーム一つ、緑色のラグの敷きつめられた居間。僕の三人のルームメイトはまだ夏休みから帰っていなかった。夕食後部屋に帰ってみてもまだニットや毛布は届いてなかった。それらを大学側が準備してくれるのだと思いきや、いたのがまちがいだと分かったのは翌朝のことだった。僕の奨学金は授業料、食費、部屋代をカバーしている。寝具も部屋代の中に入っているのだと思っていた。十時になっても誰も来る気配がないので下着ばかり入っている小さなカバンからそれらを取り出し、着ていた背広とコートをかけて、眠ったのである。これがアーモストでの最初の夜だった。外務省参事官の竹内春海氏（ア大30）は、アーモスト館三十周年パンフレットへの寄稿で、枕もシーツも毛布もなく『外套を引被ってマンジリともせず夜を明かした』とアーモスト大学での第一日目をそう描写している。

外国の旅より

苦難の生活

こうして始ったアーモストでの大学生活は「ポット出」の僕には難儀の連続だった。三十五ある専攻の内から「アメリカ研究」を選び四科目の登録をした。面白いことは、教授会の規定した「学問への責任に関する声明書」にサインを要求されることだ。それには試験は監督者を置かないとか、不正行為には学生自治体が処分を提案して学長の承認を得る、といった学生個人個人に紳士的な責任ある態度をもたせようといった配慮がある。クラスの始る前にサインしたその登録カードを教授に渡した。

ローズウェンク教授による「アメリカ史」がアーモストでの僕の最初のクラスだった。前の日に教室を見に行ったのだが、ベラベラとしゃべりまくる背の高い連中に取りかまわれると、隅の方でふるえている子ネズミに自分を感じた。教授は「アメリカの民族主義」について語りはじめた。正直言って彼の話し内容はうけとれなかった。学生が時に笑う。しかもつらをしてるのは僕だった。そんな

な状態が数週間は続いた。クラスでのジョークに笑えるようになるには大分かかったが、ノートをとることに慣れてきた。だが、難儀中の最大なもの、次から次へと押し寄せた。こちらに帰ってから後輩の英文科生からよく「しんどい」という声を聞く。「職にもつけないのにペイパーが多いし……」彼らの苦情はつきないようだ。しかし、「君はいやしくも大学生だろ？」と僕は言うことにしている。四科目だったが、最初の年の三ヶ月の苦しかったことは生涯忘れられない。十月の末頃、他のアメリカ人学生らに追いつけないことで、ある晩、僕はベッドで泣いてしまったことがあった。同じ新島スカラーで行った先輩や他の日本人留学生がどのようにして卒業証書をとって卒業していったのだろうか、と彼らが「神様」に思えたのは偽りのない当時の僕の気持だった。

僕のいた最初の学年度には、毎週月火木金、朝九時から十分間のモーニング・アセンブリに必ず半分は出なければならなかった。ジョンソン・チャペルでのそれは別に宗教行事

ではなく、教授、各界の人々、学生らの短い講演の時間だ。その出席回数が、今年一月から三分の一出席に変更されたのも、ふくれあがった学生数による。「ふくれあがった」とはいえ、千二百人であり、同志社大学の十分の一にも満たない。アセンブリーの始まる十分前からチャペル屋上の鐘が鳴り、キャンパスから遠くの丘陵部まで響きわたり、特に木々に芽のふき出る春とか雪のふり積った朝などは、印象的で美しくも一段とささるる感じだ。

アセンブリーの後、五十分授業が始り、大抵は昼で終る。一科目一週間三回。四つある食堂の一つ(各三百名)で昼食後は図書館に埋って予習やペーパーの準備をせねばならない。そして夕食。二年目から僕は夕食時にイースト食堂でいろんなバイトをした。夕食は五時半に始まるから五時前に行って先に食事をとる。ふつう学生は「セカンド(お代わり)」ができ何度でも好きな物が食べられるが、チキンやステーキ、デザートにはそれが認められない。が、バイトしている者は例外だった。一時間働いて一ドル十セント。州の最低賃銀より十五セント低いが、それでも学生にはひっぱりだこの仕事だった。皿洗い、バス・ボ

ーイ、デザート係、配食係、コーヒー・ボーイもし、卒業前のノンビリした頃には昼食にも働き、またグレイコートという「役付き」もさせられた。それらも僕には「アメリカ研究」の一つでもあったと言えば大げさであろうか。

学生の姿

学生の勉強熱心なことは僕のおどろきのひとつでもある。遊ぶにしても文字通りの「リクリエーション」で、無茶なことはいない。

「当所に罷在り候書生共、至っておとなしく、聖人の道を以て相交り、日本の書生の酒を飲みて大口をはき候事は一切致さず、只々学問を出精いたし、日に一度づつ、かのジムネーシャムに参り、球をころがし、色々の遊びを致し候。」新島先生当時のこの「書生共」は百年後のアーモスト学生の姿でもあり、いまだに変わぬ学生の真しな姿に感心したものだ。ところがこちらの学生のほとんどはどうだろう。マージャン、パチンコ、ボーリング、スキー、映画、ドライブ……。そして〇〇反対、××反対といきりたつ。そういう彼らが「大学」に來ていることは全くもって不思議



朝のジョンソン・チャペル

なことと言わなければならない。一方、確かに時代が違うのかもしれないが、今出川御門から相国寺への列をなした車がすべて「学生のもの」のようだ。金持ち親父の後光をひっさげて走らせてるのだから、アーモストでは、広々としたキャンパスをもってはいいても、二回生までは車を持ってはいけない。勉強を

しなくなる恐れがあるからだ。また車をもつと、大学当局に登録し、小さな番号札をもらう。それをつけてないと大学内には乗りこめない。こういうところにも学生個人の責任を明らかにしようという意味があるのだろう。ミスという大金持ちの息子が僕と同じ所で三ヶ月もの夏休みをバイトしたが、「君なんかそんな仕事せんでもいいだろ?」という僕のナイーブな質問に「自分の生活には自分が責任をもたんとね。」と答えてくれた時、恥ずかしさをおぼえたものだ。果してこういう考えをもっている学生が同志社に何名いるものだろうか。

デモと学生の意識

この春、アーモスト大学からの交換学生八名の内の一人として、一九四八年にマーティン・ルーサー・キング博士の卒業した黒人大学モアハウスで一週間を過ごし、たまたま彼らの秩序あるデモを見て、こちらの学生闘士連中に見せたくもなかった。学生一人一人が責任感を持ち、交通整理の警官に協力して整然とデモを進めていた。

外国の旅より

アーモストの学生には、公民権問題やベトナム問題等の政治問題にはほとんど無関心といていくらしい態度があった。ベトナムに関するティーチ・インがなりのマサチューセッツ大学で開かれた時、参加したのは百人にも足らなかつた。この二月、ブロードウェイの黒人俳優オツシィ・ディビスを迎え、近くの女子大学で公民権問題についての協議会がもたれ、それに参加したアーモストの一部の白人学生らは他の学生らから厄介物のように見つめられていた。他の学生らは、ベトナム政策に賛成するでもないし、黒人差別を信じているでもない。ただ、無関心であり、彼らのやること、つまり勉強のみに熱を入れておるとしか言えない。

しかし、ピーター・バンククロフトは行動した。彼は数学の専攻で、父はシカゴにある大学の教授。双生児の弟と共に優等生。短距離ではアーモスト代表の走者。彼は昨年六月末、フロリダのセント・オーガスチンの海辺で黒人らと共に静かなデモに参加した。法律上では黒人もそこで泳ぐことは許されてはいたが、警官隊がなだれこみデモ隊を解散させ

ようとし、「非暴力」をかかげる彼らと衝突した。そしてピーターは治安妨害・殺人未遂で逮捕され投獄された。実はそれは警官のウソの証言によるものだったが、アーモストの学生は彼を釈放させることに努力した。彼は僕らと共に卒業する時、大学側から「大学の代表学生」の称号をもらい、現在大学院で数学を専攻している。こういった出来事、こういった人々を忘れられないのもそれらが僕にとって「新しい」からでもあろうが、彼らの底にある何かに対する良心、責任感に魅せられたからでもある。何かに対する「一生懸命」の姿は美しいものだと知った。

四月の末、二日間で延べ六時間にわたる卒業試験を終え、それにパスしたことを思い出し、深いローズウェンク教授から知らされた時、苦しめつけられたアーモストでの生活が何か輝かしいものに思えてきたのである。「苦しかった」のひと言につきるアーモストでの生活が、将来、僕を導いてくれるに大いに役立つものと信じている。

(第六代新島スカラー)

台湾行



新高山の山頂にて

増田高男

ジェット機で出発

本部・大学の職員で構成する「同志社エーデルワイスクラブ」四十年夏登山の一端として、台湾新高山の登頂を計画した。田中良一先生を会長に迎え、自然を友とするグループを創立してから早や三年、こゝらで一つ海外遠征(?)を、というわけである。ところがいざ旅券申請の段階になってみると遠征隊員はわずか二人、同好の士を外に求めると破目となった。結局、隊員は私と同じ本部の川村君と、同志社讃嶺会の奥西氏、それに同志社大学山岳部OBの小野君というメンバーになった。

台湾校友会支部宛の総長・理事長のメッセージを携えて、勇躍伊丹空港から揃いの赤い登山帽を頭に、CPAのジェット機に搭乗し

たのは八月七日であった。機上わずか二時間余り、美しいクニャン姿のステューワーズのサービスを受け、眼下に広がる海原に見はれているうちに、暮色迫る台北市郊外松山空港に無事着陸した。台湾校友会の林金殿支部長や台湾の登山会の連中に出迎えられ、ひとまず台北市の富国旅社に旅装をとく。そこでわれわれが一番始めにしたことは、時計の針を一時間おくらせて、台湾時間に合わせることだった。

新高山への道

新高山(玉山)へわれわれと行をとともにする台北市登山会の四隊員とともに、台北車站(駅)から高雄行の夜行列車(特急)に乗込む。台湾の汽車には等級がなく、普通列車以外は全部座席指定で、おしぼりやお茶、それに枕・掛毛布のサービスがあり、心地良い眠りにつく。列車は深夜の台湾平野を一路南下し、翌朝まだ薄暗い嘉義に到着する。嘉義は、丁度、北回帰線が通り、これより南は熱帯地方である。

午前八時、阿里山行の森林鉄道に乗り換える。阿里山まで約八時間、二時間はど台湾平

野を横切ると、いよいよ山にさしかかる。ピストンが縦についた火車（機関車）が威勢よく煙を吐いて、後からポツポツシュッシュッと押し上げる。この阿里山鉄道の特徴は熱帯から寒帯までの植物分布が見られることであるが、小さな駅でよくとまり、汽車がとまる

と物売りがやかましく呼びかける。奮起湖という所で入山手続（台湾では政府の定める地域への入境には、台湾警視庁で入境手続を行い、入境許可証を受けなければならないが、台湾山岳地帯の大部分がこの地域内にある。）

の手違いから予想外の足止めを強いられ、思わぬところでお国柄を教えられて、一同驚いたり、あきれたり、感心することしきり。それから二日後、とにかく阿里山に着き、連絡してあった高砂族のポーターに迎えられてホツとする。阿里山は年間気温が十四度以上に上がらぬ涼しいところで、白人の避暑客らしい姿も数人見かける。

阿里山からポーターを加えたわれわれ一行は、新高山の麓へ続く木材搬出の軌道の上をテクテク四時間も歩き、日が落ちる頃やっと東埔招待所（日本の簡易旅館）に着く。新高

外国の旅より

山への登山路は急坂も少なく、道もよく踏まれているが、ここからたつぷり七時間はかかるとのこと。招興酒を飲んで、早々にシユラフにもぐり込む。

翌朝三時半起床、懐中電灯を頼りにいよいよ新高山への山道をたどる。取付きには路傍に百合の花や、鈴蘭によく似たあざやかな紫の花が、われわれの目を楽しませてくれたが、高度が上るにつれてエゾ松・トド松と寒帯植物が見え出し、白く無気味な立枯れのような林もあらわれてくる。えんえんと続く登りに、屋根だけの排雲山荘に着く。日本から持参したインスタントジュースにのどをうるおし、台湾パンをかじって、いよいよ山頂への急坂に取付く。寒帯林を抜けるとガラガラ岩場に出るが、目指す頂上はなかなか姿を見せてくれない。急峻な岩場の陰に「エーデルワイス（みやまうすゆき草）」を発見して、今更四〇〇メートル近い高度感を味合う。午後になると必ず出るといふ雲が、次々と深い谷間から湧き上がり始めた頃、悪戦苦闘の末やっと頂上に立つことが出来た。高度三九九七メートル、日本においては経緯することの

出来ない高度である。岩だらけの頂上に立つポールに同志社の旗を結びつける。山頂からの眺望は四囲見下すものばかり、遠く次高の頭まで三〇〇メートル級の高山がえんえんと連なっている。広大な天地は物音一つしない。快晴の空に湧き上がる白い雲をバックに同志社の旗がぎざりばかりにはためく。われわれは口をきくことを忘れたようにじっと立ちつくしていた。

台北にて

戦時体制とはいつても市街は平穩そのもので、軍人の姿こそあちこちで大勢見かけられたが、夜は十二時を過ぎても活気があふれている。連日中国各地の有名な料理を、台湾・



北京・四川・広東と食べ歩いたが、上海料理を食べに入った時のことである。食事半は卓上にスープの大鉢が置かれた。何気なく添えられたしゃもじで底をかきまわす、白く濁った汁の中から浮び出たのは、何と鶏の足ではないか。黒いのもあれば黄色いのもある。爪こそついていないがまさしくコケッココの足に違いない。中国料理では高級に属し、美味この上なしとすすめられ、ものはためしとこそるおそる一つをつまみ上げる。口に入れて案外いけると思ったが、あとは麦酒でグツと流し込んだ。

果物はさすが熱帯国、フルーツの王国といわれるだけあって、多種多様の果物が屋台の店頭に並んでいる。リンゴはないだろうと飲店で注文してみると、ちゃんと赤い台湾産のリンゴが皿のつて出てくる。バナナ・パイ



新高山の頂上を望む

ナップル・パイナップル・マンゴー・西瓜・龍眼といろいろ食べてみたが、なんといつてもパイナップルが最もおいしい。真中に穴のあいた、罐詰のパイナップルを食べなれたわれわれにとって、生のままのパイナップルは珍しく、料理のあとにはきまって注文したが、いくら食べても飽きが来なかった。

酒店(ナイトクラブ?)へも行ってみた。大体三十才以上の人々は日本語が話せるが、面白いことに「おしほり」「お勘定」「ながし(演歌師)」等はそのまま日本語である。

また政府が嫌っているのに日本の歌が大好評で、そのながし等はわれわれも知らない日本の最新流行歌を演奏してくれた。酒店の廊下で出合う酔っぱらいが、肩を組み合って炭坑節を口ずさんでいるという具合である。

校友会の集り

一夕、同志社校友会の台湾支部会に出席した。会場は林金殿支部長経営するところの日本料理店「甘露寺餐厅」である。壁面には同志社の旗やペナントがかけられ、一晚どまりの遠方からの出席者も多数あり、台北駐在の日本商社の校友の姿も見られ、家族ぐるみの

盛大な集りであった。牧師であり、台湾校友会で最年長者である校友の祈禱で会が始められ、われわれが持参した総長・理事長のメッセージが読み上げられた。会合中の庄巻はカラー映画「同志社大学」の映写時であった。彰栄館やチャペル等の校友たちになつかしい赤煉瓦の建物がバックミュージックのカレッシュソングにつれて次々と映ると、一シーンごとくに子供のように歓声があがる。とにかくわれわれには先輩ばかりであり、戦後始めて同志社当局からの台湾訪問であるというので、大いに歓迎を受けたが、宴半は「せめてわれわれの子弟だけでも、われわれの学んだ同志社に留学出来ないものだろうか」と切々と訴えられ、ここで始めて日本の速さを深く感じたのである。飛びかう交通機関によって、世界が小さくなったことを身をもって感じていたのだが、本当は近くなっていないのだろうか。「よろしい、何時でもいらして下さい。」と言えないはがゆきと、いてもたってもいられない感じで一杯だった。先輩一人一人の熱のこもった言葉とその目が今でもはなれないのである。

(本部職員)

島のネオボル から調査

同志社大学ボルネオ島
学術調査隊



ブルナイとサラワクの調査

ボルネオ島には、マレー人やその他イバン、ドゥスン、ケニア、ケラビ等という多くの比較的未開な種族が住み、稲作による生活を送っている。彼らの稲作生活・技術には、わが国古代の最早失われてしまった生活・技術と

良く似たものが多く残されており、非常に興味深い研究地域である。一九六四年の十一月、偶然の機会から文学部内で、ボルネオ島の農耕・漁撈生活を調査し、日本古代史の不

外国の旅より

明な部分を少しでも解明する手掛りを得ようという機運が興って、故人となられた酒詰伸男教授を隊長とする学術調査隊が結成された。初めは二月出発の計画であったが、ビザの許可や資金調達のため、時期をおくらせ、四月中旬先発隊出発、七月初旬本隊出発という計画に変更せざるを得なくなった。

五月十日に先発隊の田中正男(文四)、水落和洋(法四)両君が三週間にわたるサバ州の予備調査から帰り、その報告から本隊の調査地域をブルナイ国とサラワク州に決定し

た。しかし準備もすずみ、出発の日も迫った五月三十日に、突然、隊長酒詰先生を失う悲しみに遭遇してしまった。隊は支柱を失い、一時は中止の声もあったが、静枝奥様や諸先生方の励しをえて、先生の遺影を隊長(隊長代理小川光陽文学部教授(内地残留))とする調査隊は七月三日神戸港を出発し、十日ブルナイ国の首都ブルナイ市に到着した。隊員は江畑武(院博)、石附喜三男(院博)、鈴木幸三(文四)の三名である。

七月中は、ブルナイ政府からの調査許可と後援をうるための折衝もあり、荷物の到着が二十日余り遅れたこともあって、ブルナイ市近辺のマレー人農家やイバン族の村を調査し、八月から行なう本調査の準備に費やした。しかし、この調査においても、ネズミ返しのついた高床式米倉やタテギネ・舟形ウス等、われわれの研究対象が至る所の村で見られ、予期していたことではあったが、やはり大きな驚きであり、喜びでもあった。

八月に入って、三名は調査地域を拡げるため各々異なった地域に向うことにした。鈴木隊員は、ブルナイ国の農業局に勤務され農業指導に専心されている鈴木暁夫氏の紹介で、八月五日トゥートン地区のドゥスン族のウコン

村に入り、九月二十三日までの五十日間を村長の家に泊り、畑仕事をしたり、家を建てたり、墓を造ったりして、彼らと共に生活した。その間、もっとも苦労したのは、健康な日常生活では欠く事のできない用便であったという。これから簡単ながら、三名の隊員の行動や経験した苦労話を紹介しよう。

鈴木隊員とトタ

鈴木隊員の話—この村に着いて、まずびっくりしたのは気味悪い風体をした豚である。体の半分ほどが長い頭で、むしろイノシシの方が可愛いらしいぐらいであった。大きさは日本の成長した豚の半分ほどが最も大きいものであるから、さして脅威は感じない。しかし、私はこの豚に毎日世話にならざるを得ないのであるから、最初は処置なしのていたらくであった。

—というのは、他のドウスン族やイバン族の村と同じく、ウコン村の家にも便所として定められた場所がない。彼らの家は高床式で、地上から一・五メートルほどの高さに床を張り、床下に豚や鶏を飼っている。床板は居間ではすき間なく張りつめられるが、台所では三センチほどのすき間をもたせている。彼らは、この床板のすき間の上にしゃがみ込んで用を足すのである。私にはどうしてもそれが

できない。そこで、私は茂みに入って済せていたのであるが、臭気やか、豚が近づいてきて、まわりをかきまわすため、気味が悪く、ろくろく落着けない始末であった。

—こうした話を誌上に発表するのは、ドウスン族の生活における豚の重要性を考えてのことである。われわれは日本を出発する時、イバン族やドウスン族の村は、さぞ蠅の多い不潔な所であろうと想像していた。しかし、実際に村に入ってみると、想像とは全く異なっていたのである。便所もないのに清潔なのは、全く豚のお蔭である。豚の食料としては、サゴヤシの幹、パンバンといわれる植物の根、ロタンといわれる籐の実などがあるが、人糞もまた重要な食料であって、人間の「固体」は豚がたちまち処理してしまうので、蠅もいなければ臭気もない清潔な環境が生みだされているのであった。

—初めは困り果てていた私も、村の生活に慣れていくにつれ、豚に対する気味悪さも消え、むしろ愛着さえ感ずるようになっていったのは、日常生活における重要さを考えれば、当然といえるであろう。

シバタン村の生活

石附・江畑隊員は八月七日ブルナイ国をで

て、マレーシャ領のサラワク州に入り、日比木材会社のご厚意により、相前後して、バラム川流域の東経一一四度、北緯三度四五分付近にあるキャンプに向った。

—江畑隊員の話—十一日にキャンプに到着した私は、石附隊員と共に十六日までキャンプ付近のイバン族やプナン族の村を調査し、十七日にパアゴン村に入った石附隊員と別れ、シバタン村に入る事になった。

—この村はイバン族で、他の多くのイバン村と同じく一つの長屋を中心とし十一個の物置小屋からなっており、長屋は東西六十九メートル、南北の奥行約二十一メートル、人口九十六人で、一人の首長が統率している。彼らの生活の基盤は稲作、それも陸稲で畑は三カ所あり、最も大きなものは丘三つにまたがり、三万平方米もあつたろう。畑仕事は、五月に密林を切り開き、六月に乾燥させ、七月に火を放って焼き、八月から種まきを始めたのだという。種まきは部落総出で行われ、多い時は二十人ほどの青年がトゥガルという掘棒で畑地に深さ七センチ直径五センチほどの穴をあけていき、後から女性を主とした一団が穴の中へ種をまいていく。単純な作業であるが、連日三十五度前後の炎天下で、強烈な直射日光をさえぎるものとなない平地であるから、かなり重労働でもある。とくに三十

度ほどの斜面では大麥で、そこには焼け残った一抱え以上もある大木が入り乱れて横倒しになっており、ある時は跳び越し、あるいは地をはつてぐりながら、穴をあけ種をまいて行かねばならない。彼らにしてみてもきついであろう、二十メートルほどの斜面を一往復すると、必ず休憩になる。村での生活は僅か六日間であったが、種まきをし、豊作を祈る予祝祭に参加したりして、彼らの生活の一端を見ることができた。「スラムット・ジャラン（こぶじで）、日本人が手助けしてくれたので、きつと豊作だよ」などと、さんざんお世辞をいわれながら、二十二日に村を去ったが、なにか親しい人々と別れるような淋しさを感じた。

リンバンの米倉

石附隊員の話―バラム川流域の調査から一足先にブルナイ国に戻った私は、二十五日から一週間の予定でタンブロン川流域のイバン族の調査に向った。ブルナイ国は、間にサラワク州の一部を挟んで東の地域（タンブロン地区）と西の地域（ブルナイ・ツートン・巴拉イト三地区からなる）とから成立っている。タンブロン川は、そのタンブロン地区をほぼ

縦断して流れる川で、上流にイバン族の村が四つあり、これらがボルネオにおけるイバン族の分布の東北限になっている。その村の一つアモー村を基地として、上流に二キロないし三キロほどの間隔で散在している三つの村を歩いたわけだが、この地区の長屋はきわめて小さく、大きいものでも長さ四十メートルに満たぬものであった。また、ここでは私が行った時期ではまだ陸稲の種まきを行わず、木を切り倒した畑予定地にやつと火を放った段階であった。

九月上旬をクチンのサラワク博物館の見学で過し、十三日から一週間サラワク州リンバン地区の調査を行った。リンバンの町の周辺にもブルナイ市近辺でみられたネズミ返しのような米倉が多数みられた。それらは穂にモミをつけたまま貯蔵しておくための倉で、日本の古代にも同様のものが多数存在したのであった。リンバンのこうした米倉はやはりマレー人のものであった。このリンバン地区とタンブロン地区の境界をなすのがパンダラン川で、この流域にも数カ所ずつのイバン村があり、調査したのは二つであったが、三泊したルダー村で地機に使う繊維の染色の実際を見ることができたのは、思いがけなかった

し、またうれしかった。これらの村、あるいはその近くのマレー人の村では、ちょうど種まきの最中で、広い畑の一部では稲が十センチ近くも伸び、他の一部ではやつと芽が出たばかりという状態だった。また、マレー人の中で湿地を利用して田植えを行っていたのが観察できたのは貴重であった。

石附・鈴木隊員が十月二十二日帰国し、二十四日、酒詰先生の御霊前に帰国報告して調査を終了した。イバンやドゥッスの村で、また興味深い出来事に出合う度に、〃先生が一緒であったら〃と残念で仕方なかった。ともかく無事帰りました。ご安心下さい。

わずか三カ月間の調査にすぎず、もう少し期間が欲しいと思うことはしばしばであったが、今回の第一の任務は第二次・第三次と継続されるであろう調査のための基礎調査であり、その目的は一応達成し得たと思う。

調査隊派遣に際しては財界・大学を初め多くの方々のご援助をいただき、現地では竹原造船所、日比木材社、岡持木材社、泰成洋行および個人の方々、またブルナイ政府の農業局から後援をうるためには宮入正人先生のご尽力をいただきました。末筆ながら、衷心より御礼申し上げます。